

いってもそれはまた得られるが、母国の敗戦はどうなる。負ける前に止め得なかつたものか。

満州へ行った妹はどうなる。父母長男次男妻の実家はとうなる。不安は果てしない。

しかしあまりの残念さに遂に留明の鯨によって再び樺太を見なければならぬと船の荷役などをしながら浜辺の瀬越しという所へ住むべく小屋を建てましたがしかし鯨はここへも寄らなくなったのです。寄らないからといって彼の地の様なわけにはいきません。すっかり窮迫してしまい五人の子に三度の食事も欠くことたびたびでした。しかし子供には泣いてはいけない悪いことをしてはいけない断じてこらえるのだ。アメリカの日本ではない日本の日本だ心を持って日本を築くのだ。しかし日本も負けたのか。

子供等は小学校だけで旅立ちました。役には立ちませんが悪いことをする子はいません。これは妻の素質によるところ大ですが、安心のもとでもあります。しかし一人になってみて借金が三百万ほどありました。これを返済すべく土木夫に雇われまして年は六十七でしたが、数

年たちました。人に迷惑をかけないようにと神を念じて一銭残らず返済の恵みをうけました。残余の五百万は美に八十二までの老人ホームへの滞宛料となったのです。

此の神様は青森県に本部のある大和山という日本の神様です。愈々体も弱りを感じようになりまして養護ホームという現在の緑風苑に入れてもらったのですが、あゝ戦後の施設か死の心配はなし料金は収入以内かくて飼われている感じが深いです。

旭川市は拓かれて百年にあたるそうです。

百年の稜線すがし馬肥ゆる

私という馬はこのすがすがしい稜線の山に太っています。今日もまた江差町の先祖を偲ぶ追分節がこの稜線の極楽境に流れることでしょう。

私の終戦前後

北海道 橋 詰 春 水

私は樺太生まれ、樺太育ちで職業は教育畑で小学校教

員から中等学校教員まで勤めていた。昭和十六年四月から樺太庁泊居高等女学校に勤務していたが、終戦前の十八、九年頃から授業ばかりではなく、生徒とともに春には鱧漁場、夏秋には農家への奉仕が主となって来た。

学校には漁場用のモッコ、脚絆の作業衣等がそれぞれ五十人分ずつ用意されていた。終戦近くになったら木銃も用意され、配属将校が週一、二時間来ていた。

春の漁場奉仕は、泊居沿岸一帯から、追手野田には寝具をもって宿泊一か月ぐらい続いた。

夏の農家奉仕も北は珍内、久春内方面の宝沢へと、生徒達は大変な苦勞の連続だった。

二十年八月十五日、朝から重大放送があるとの通報を受け、職員室に一台あるラジオの前で、終戦の言葉を緊張の中で聞いた。飛ぶようにして受持三年生のクラスへ報告に行った。生徒達は皆声をあげて泣きくずれた。私は涙をこらえながら、これからのことをいろいろと話し合ったことが思い出される。

その後、ソ連軍が国境を越えて侵入とのことで学校も緊張の連続だった、泊居方面へ向かっている部隊がある

とのことで、休校をすることとし、生徒は家に帰した。

遂に女学校もソ連軍が侵入して来た。幸いなことに学校近辺の民家にはいらず、三日ほど駐屯していたが、三日目の朝登校して見ると、部隊全員が移動したあとだった。学校内はひどく荒らされていた。

私の住んでいた泊居町は、大きな被害もなかったが、後日樺太西海岸では泊居町が一番穏やかだったと聞かされたが、それは町の有志で北樺太で働いた経験のある人が部隊長と、話を通じたからだと聞かされて有難く思った。小学校の校舎全体は北からの避難民で、ゴッタ返しの状態であった。

女学校の寄宿舎生は全部家庭へ帰って行ったあとであったが恵須取の高女生が避難して来ているので学校長の許可を得て住むように取り計らったこと等思い出される。

学校も開校し、授業もするようになり、不安の中でも生徒も登校し、勉強も出来るようになった。ソ連の学校は九月に新学期とのことで私は七月八月は「パスポート」日本の「身分証明書」を発行する手伝いをする様に

と、学校長から依頼された。ソ連の課長以下十四、五人の中の日本人五人中の一人だった。仕事は露語の下に日本漢字を書き並べることであった。泊居、大策、名寄、久春内の各地を廻り歩いて全部終了に二か月ほどかかった。

二十二年五月二十日頃引揚命令が出て、函館上陸は六月三日であった。以来私は岩見沢で教員生活も終わり、住居も構えて、年金生活で現在に至っている。

追記

その頃旧樺太の国境古屯、気屯等での烈しかった戦争での日本兵の遺骨収容の新聞記事を読んで痛哭の思いがこみあげてくるのである。再々度「樺太一九四五年夏」という本を読んでいるが、中に小学校で受持った事のある児童名が出て来るのがあつたりして涙にくれることがある。

泊居高女の最後の卒業生（二十二年）も皆が還暦を迎えたようだ。全国に散り々になっている卒業生が北海道方面と東京方面で同窓会、クラス会が毎年のように開催されている。北海道では今年二十五回目だった。私も出

来るだけ出席することになっている。

終戦と私

北海道 橋本 幸彦

終戦直前

太平洋戦争がたけなわを過ぎ、日本が敗色に傾いて国中の老若男女は何らかの形で戦争にかかわっていた当時、私は三菱の傍系である南樺太炭鉱鉄道北小沢炭鉱（炭鉱長 片岡良太郎氏）に勤務しておりました。

樺太の炭鉱は殆どが保坑、又は休止となり、九州と北海道の炭鉱にその従業員の大部分が徴用転換させられたのでした。

私は北小沢炭鉱の残留要員として、管理業務と留守家族を守るため樺太に残りました。

終戦とその直後

昭和二十年八月十五日、終戦の玉音（ラジオ）は防空壕の中で聞き涙を流し残念がったものでした。終戦直後